

2. 就職委員会だより

委員長 大内 侃

昭和60年度の就職状況は右の表のごとくである。この変哲もない表には、苦勞に苦勞を重ねて内定をかちとった者もいれば、意外にすんなり決った者もいて、回想にひたることひとしきりである。

ここではそうした個別的なドラマを描くわけにはいかない。全体を総括してみたい。

そこでまず言及したいことは、民間企業の出足が例年になく早かったことである。夏休み明けには大勢が決っていたような印象がある。民間企業の動きがこのように速いと、公務員や教員を目指している者はよほど確りした気持ちでないと、浮き足立つので用心しなければならない。また、民間企業を希望している者で内定を得ていない人に焦りが生じるので同じく用心しなければならない。企業側の動きが速いといっても、業種によって、会社によって異なるので、自分の目指すところとよく連絡をとることが肝腎である。

会社訪問の順序で相談をうけることがある。どうということかという、自分の本当にいきたいと思っている会社いきなり飛び込んだ方がよいのか、それともある程度、面接慣れしてから行く方がよいのかという質問をうけることであるが、それは本人の性格によるので、一概には答えられないが、要は縁があるかどうかということだろう。先方には経験？というこちらにはない武器をもっていることを尊重しよう。

第2に相当に難関であると思われるところを、さりげなく突破した者がいるし、新しい職域を拓いた者のいることは心強いかぎりである。

第3に地方の時代ということで、出身地に職場をもとめる者が全体の3分の1強にのぼっている。根強い傾向である。

第4にマス・コミ志望も根強いが、今回はテレビ放送への就職者が新聞社へのそれをうまわまっていることが特徴といえよう。

第5に電気産業・情報産業への就職は相変わらず好調である。理系はもとより、文系にも情報産業の門戸が大きく開かれていることは喜ばしい。同時に反省材料もあった。それは、社名は出せないが、ある会社が数名の者に内定を出し、これに学生側はコ

ミットメントしていながら2ヵ月後にことわるというケースであった。内定をことわるのはいたしかたないとしても、おことわりする時期を考えてもらわなければ、困る。委員長の私が先方に出向いて、お詫をしてきたが、常識と慎重さを欠く一件であった。

ことのついでに、ここで在学生諸君にいておきたいことがある。就職が一生の問題であるとはよくいわれる通りであるが、一生とは「いま」・今の連続として力強く築いていくものであって、鉄道の線路のように予め敷設されていない。それ故、誇大妄想におちいたり、いたずらに悲壮にならずに、素直に自分をみつめて、自らの志望を見出ししてもらいたい。

最後に大学院の進学をめざす者が例年になく多い。昨年は生物圏科学研究科が発足し、今年春には社会科学部が新設されることがそうした傾向を生み出しているのだと思う。総合科学部の前途は明るい。

いずれにしても諸君、卒業おめでとう。それでは花も実もある人生を大事にしたのしんでらっしゃい。

(委員会の森 利一氏の協力をえた。感謝する。)



昭和60年度卒業生進路状況

(61.3.20現在)

	地域文化	社会文化	情報行動	環境科学	計
卒業生予定数	(13) 34	(3) 31	(14) 29	26	(30) 120
進学	(2) 9	1	(3) 6	10	(5) 26
公務員	(1) 4	5	(1) 1	0	(2) 10
教員	(1) 4	2	(1) 3	2	(2) 11
企業	(7) 15	(3) 23	(9) 19	10	(19) 67
自営	0	0	0	0	0
無職	(2) 2	0	0	4	(2) 6

() は女子で内数

就職内定企業名

(公務員・教員を除く)

地域文化	社会文化	情報行動科学	環境科学
タカキベーカーリー	タカキベーカーリー(2)	ヤクルト本社	日本テルベン化学
日立製作所	三菱アルミニウム	日亜電子化学	小西六写真工業
シャープ	松下電器産業	日本臓器製薬	フマキラー
鳴海製陶	シャープ(2)	三菱電機	熊平製作所
伊豫銀行	鎌田利	日本電気(2)	マツダ
ロイヤル	ホームイング	ソニー	三洋電機
富士通エフ・アイ・ピー	荏原製作所	中国電力(2)	広島銀行
中国日本電気ソフトウェア	興国ゴム工業	日本ユニパック(2)	日本タイムシェア
富士通第一通信ソフトウェア	中国銀行	中国日本電気ソフトウェア(2)	アジア航測
関西日本電気ソフトウェア	大分銀行	三菱電機コントロールソフトウェア	菱明技研
日本航空	香川相互銀行	富士通徳島システムエンジニアリング	
日本放送協会	日本勸業角丸証券	全日本空輸	
毎日放送	日本生命保険	両備運輸	
中国放送	朝日生命保険	広島ホームテレビ	
都市環境研究所	広島そごう(2)	中国新聞社	
	日本ソフトバンク		
	日本交通公社		
	近畿日本ツーリスト		
	共同通信社		
	京都生活共同組合		

就職内定公務員・教員名

地域文化	社会文化	情報行動科学	環境科学
(公務員)	(公務員)	(公務員)	(教員)
岡山県(上級)	裁判所(中級)	国家公務員(Ⅱ種)	広島県(高・数)
愛媛県(上級)	広島県(上級) 2	(教員)	佐賀県(高・理)
広島市(上級)	大阪府(上級)	広島県(中・数)	
呉市(上級)	香川県(上級)	広島市(中・数)	
(教員)	(教員)	大分県(中・数)	
山口県(高・国)	岡山県(中・社)		
岡山県(高・英)	兵庫県(高・社)		
山形県(中・国)			
滋賀県(高・英)			

大学院修了予定者就職内定先調

(企業)			(公務員)
富士通(2)	三洋電機	持田製薬	広島県(林務部)
松下電器産業	中国日本電気ソフトウェア	大鵬薬品工業	広島市現代美術館(学芸員) [○]
日本農薬	東和化学	マツダ(2)	(教員)
武田製薬	三井東圧化学	中電技術コンサルタント	鹿児島大学(医学部助手)
大手開発	荒谷建設コンサルタント	日本放送協会	広島県(中・理)
河合塾 [○]	住友特殊金属		静岡県(高・数)
広島県民センター [○]			

○印 地域研究研究科 無印 環境科学研究科

極私的マスコミ志望論

「—作家かジャーナリスト」。

小学卒業時の文集に、将来就きたい職業として私はこう記している。マスコミ(毎日放送)に就職が決まったというのも、この時の夢のひとつが実現したというだけのことで、逆に言えば意外性ゼロ、なるべくしてなったというお話。父親が中国新聞に勤め、兄貴が一昨年朝日新聞入社を果たしたという特異な家庭環境に育って来たものですから、ごく普通のマスコミ志望の方には拙文は余り役に立たないかも知れません。念のため。

小さい時から、本と原稿用紙に埋もれて育った私はやたら好奇心旺盛で知的関心領域が広がった(早い話が発想が野次馬的で、飽きっぽい性格だったということ—マスコミ志望者には、自分を全て良い

地域文化コース4年 大牟田 聡

面のみで捉えるという厚顔無恥な部分が要るんですよ♡)。総科を選んだのも本来の目的であった(はずの)比較文学に留まらず、国際政治や経済、ひいては心理学や環境問題に至るまで、幅広い視野を得るがためであった(結果は別としても)。

とにかく食欲であること。学生の特権はふんだんにある(はずの)時間を心おきなく浪費することに尽きる。サイクリング部に入部し、三年間全国各地をキャンプしてまわったことも、映画を年間百本以上観たことも、はたまたRCCのDJコンテストで入賞し、ミ=FMで半年近くDJをやったことも、結果的には全て良き経験として蓄積されたように思う。しかもそれぞれが無意識の内にマスコミに近づく手段となっていた。映像への関心、アナウンス技

術への自信はもとより、自転車によるツーリングまでが体力面の充実と共に、生まれ育った広島を脱出しての広い見聞を可能にしたという意味で、非常に重要な意義を私に与えてくれたからだ。面接の際も、このことが話題となり、評価の対象になったように思う。

—ここまで書いて来て、やはり「極私的」だなあと思う。単に自分の場合、生活と手段が合致していたというだけのこと。まあ多かれ少なかれマスコミ志向の人間には必要なことだと思うけど、あとは各人で考えて下さいな。

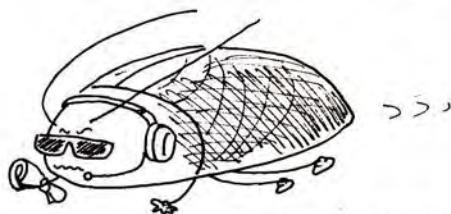
というわけで、いきなり実践編。まず自分の適性と相談すること。マスコミは華やかだなんて誤解で憧れたりしないように。表面に出て来るのはほんの小指の爪の先ほどで、大多数は地味で、しかも仕事は厳しく、若い内は人間の生活をさせてくれない。休みなんてありゃしないんだから。父親と兄貴の仕事ぶり見てて、ほんとそう思う。冷静に自分の生き方を選択しませう。

それでもマスコミを志望する人へ。必要なもの、まず自信過剰。といっても減多やたら自信があればいいというものでもない。入ってから何がしたいか、それはどうしてか。今の新聞（放送）には何が足りないのか、それではどうすることが望ましい在り方なのか。じっくり考え、できれば文章化しておくこと。そして自分がどういった面でその会社に役立つのかを十二分に意識すること。実際、こうした考え方を深めておくと、他の受験者がアホに見える。三社受ける内にいろんな他大学の志望者と話をしたが、おっとなかなか鋭い、と思わせたのは、番組製作志望の早大出身の奴だけだった（尚、彼もまた同じく毎日放送に入社が決まっている）。ということで、TBSを落ちた時も、「この俺のどこが不満なんだこのヤロー」と悔しさが先に立ち、「見る目のない

奴らだ」とパカにしていた（もっともこの自信過剰も受験期のみ有効、みんな本当は手強いんだよ）。

次に必要なもの、自己顕示欲。といってもTVカメラにピースすればいいというものではない。自分の考え方、主張を何とか他人に伝えたいという執念みたいなもの。一方で自己表現だけでなく共同作業への対応能力も要求される。

以上二点を踏まえた上で、受験する対象もせいぜい三〜四社に絞っておく。あわよくば—で数多く受験するのは、志望理由が曖昧になるし、まず採用



ゴキブリはマイクとメガネ!

はないと考えて良い。ここしかない、という意気込みさえあれば、五十倍、百倍の競争率も怖くない。

うーむ、支離滅裂なうちに紙面が尽きてしまった。要は学生時代を有意義に浪費すること、絶対マスコミへ行くんだという決意の固さ。放送でいえばキー局、準キー局は地方大学生には不利だけど、不可能じゃありません。偉そうなこと書いて来たけど、自分にとって本番は入社してから。採用されることを最終目標にしたい人はマスコミに向いていません。てなわけであとは自分でやりましょう。健闘を祈ります。ではまた。

「ハウ・ツウ・マスコミ」

不自然な自己宣伝は嫌いである。よって「合格体験記」の例は嫌いである。就職なんてつきつめれば人生観の問題。他人にとにかく言われる筋合いのものではない。自分で考えれば良いのだ。

自分で考えた末、私はジャーナリストになりたいと思った。あとは試験という目標があり、成算と打

社会文化コース4年 H . H 生
算があり、そして努力 — 味気ないものだが、そんな図式が成り立つ。ここで、はたと困った。何から手を付ければ良いのだ。周囲に相談できる人は居ない。仕方なく、早稲田の友人に話を聞いたり、新聞社に入社された先輩を訪ねたり、果てはマスコミ受験塾なるものを取材したりもした。その結果がこの

文章である。マスコミ（特に新聞社、通信社）に進みたい人にとっての、一つの手がかりとなれば幸いである。

〈筆記試験対策〉

新聞をすみずみまで読む。最初はみっちり三時間はかかる。読むべき記事の取舍選択が出来るようになれば、30分で読める。『現代用語の基礎知識』は必携。「日経」を読む必要はない（日経に行きたい人はともかく。）『朝日キーワード』はお勧め。「人民朝日」の書くことが全部正しい訳ではないが、この本が頭に入っていれば筆記で六割は固い。『新聞ダイジェスト』も直前の知識整理には便利。プラス、公務員試験の教養分野用問題集をやれば完璧。

漢字、故事成語なども、何か問題集を。意外に知らないものだ。

〈作文〉

とにかく書くしかない。書いたら、親、兄弟、友人、家庭教師先の子供など色々な人に読んでもらう。高校生の批判は重要。彼等に受ければ、大丈夫、誰にでもうける。金はかかるが、「早稲田マスコミセミナー」の通信添削もある。これは現役のベテラン記者が講師をしており信頼できる。

作文のネタは読書量が物を言う。私は、ハルバースタム、斎藤茂男、松浦総三などジャーナリストの書いた本を三、四十冊位読んだ。野坂昭如のエッセイなど、ジャーナリスト・アイの最たるもの。向田邦子、開高健の文章はいい手本になる。

何千人の受験者の中であって、目を引こうと言う

のだから、独創的な視点が要求される。私は「政治」なんて題が出て、クラシック音楽と結びつけた内容を書いたりしていた。

作文上達には半年はかかる。念のため。

〈英語〉

英語は得意だと思っているあなた、試しに「TIME」を読んでみなさい。読めないでしょう。実力不足を悟ったら勉強するしかない。勉強法は各人各様。『英字新聞・単語倍増法』（朝日イブニング・ニュース社）はお勧め。『新聞ダイジェスト』に載る朝日新聞社説の英訳は、英作文に使える。

〈面接〉

言葉がまずなければ情熱も伝わらないのではない。なにしろ面接時間はせいぜい15分。しかも、「実年」世代と話すことに私達は慣れていない。

一般企業の会社訪問は、ただで面接の練習をさせてくれる貴重な機会。不謹慎かも知れないが、利用させてもらうのも手であろう。

〈その他〉

採用のシステム等については『マスコミ就職読本』（創出版）が役に立つ。内容の正確さについては、某新聞社の人事部長のお墨付き。

最後に一つ。マスコミに行きたいと思ったら、現場の人々の話をなるべく聞いて欲しい。レディース・コミック誌に出てくるような、おちゃらけた雰囲気はどこにもないことがよく分る。マスコミ関係者の平均寿命は、他の職業の人々より10才以上短いというのが定説である。健闘を祈ります。

『飛翔』委員大募集!!

『飛翔』の勧誘である。入ってほしい。人数がたりん。さしあたって言いたいのはこれだけである。これだけで入れというのも無理だから、ひと言だけ言っておけば、「『飛翔』は教官、学生が一緒になって作る」という点である。ここに可能性を見いだすのは君だよ、君。

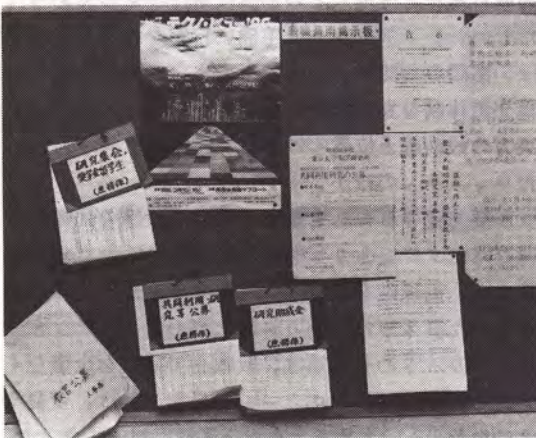
というのが現在の『飛翔』委員の切実な声なのです。だから、新入生の皆さん、編集をやったことのない人でも、書くことに自信のない人でもちょっと関心をもっているならば充分やっつけていきますので、是非入って下さい。強制のあるものではありません。ちなみにイラストや写真だけをやりたい方も歓迎します。自己満足の世界に浸りたい人にはうってつけです。

さらに、自由投稿は歓迎します。原稿・イラスト・表紙・写真、なんでも結構です。総科にもの申す、などの過激な原稿は『飛翔』委員が泣いて喜びます。厚生補導係または、編集委員までお届け下さい。

3 0 1

編 集 部

111・47・28・30・26・59……これが何の数字かお分かりだろうか？これは総合科学部の新館及び、自然科学棟の廊下・教室に貼ってあるビラ・掲示物の各階ごとの枚数である。（2月8日調査）合計すると301枚となる。現在は、ビラの匂ともいえるクラブ勧誘期ではないため、4、5月と比べると三分の一くらいではないだろうか。それでも数えるのに一時間くらいはかかったのであるから、この取材が2月であったことに私はほっとしている。ビラの内容はというと、補講通知、休講通知を始めとして、少ないけれどサークルのビラ、みなさん御存知の“鳩が入りますので退出の際には窓を閉めて下さい。”のビラ等、公的な文書から全く身内の通信まで、あらゆる範囲に及んでいるのである。



中でも、現在はチラホラ程度のサークルのビラもいざ貼り付けて回るとなると仲々大変である。今回唯一といってもよい某サークルのビラなどは、廊下、階段は言うに及ばず、男女それぞれのトイレの中まで貼ってあったのには驚いた。もちろん、貼り付けが大変であれば、当然はがすのも一苦勞で、原則として、廊下、階段等に貼ってあるビラは、厚生補導係の人に見つかりしだい、手あたりしだいはがされる運命にあるそうなのである。4、5月の廃棄処分となるビラの量となるやものすごいものであり、はいでもはいでも、貼りつける、とまるでイタチごっこなのである。

しかし、それだけ苦勞というか、手間をかけられ

ているビラも、果たして、どれだけの効果があるのだろうか。確かに、掲示板に貼ってある、公の通信の手段としては、かなり有効なものではある。ところが、それでも奨学金の手続きが遅れたり、休講を知らずに教室で待っている、ということは充分あり得るのである。（注：冒頭の数字には掲示板の掲示物は含まれておらず、その数は131枚であった。）となると、例えば、サークルの部員募集のビラなど、ほとんど期待薄ではないのか。わざわざ自分の入りたいサークルを探しに新入生が階段の踊り場に足を運ぶなどとは思えないし、似たりよったりのビラが所狭しと並んでいるのを見て、うんざりした人も少なくないだろう。そうすると、サークルのビラなどは、紙のムダ使い、景観を損うものであり、貼り付けた当人以外にとっては不要なものなのかもしれない……。

しかし……思いきり気のきいたビラ、思わず笑いがこぼれるような内容、（私は今まで1枚も見ることがないけれど）のビラがあったとして、本来の役割からは逸脱しているかもしれないが、そのビラの実在価値は充分ではないだろうか。例えば、サークル入会期を逸してしまった1年生が、興味のあるサークルを、ビラの群れの中で見つけたことができれば、それがたった1人であっても、それでたぶん、充分なのではないだろうか。

役割をきちんとこなしている通信ビラよりも、すぐにひっぺがされるビラの方が哀愁が漂って、ほっとしてしまうのは、たぶん私だけなんだろうな。

（文責 小笠原 弘明）

マーシャルで出会った人々

人類学にとって調査は自然科学における実験のようなもので、この10年の間、約2年に一度の割でミクロネシアに旅行している。この地域に対する私の関心は全く人類学的なもので、とくに近代の歴史に関わるものではない。しかしながら、元の日本領（委任統治領）であったという歴史的な背景から、調査の度に多かれ少なかれミクロネシアと日本との関わりを考えさせられた。昨年訪れたマーシャルでも、調査に協力してくれた人々や、偶然に出会った人の中には、調査に迫られる生活にもかかわらず、気にかかる人が少なくなかった。

その一人はカナメさん。がっしりした体格で、陰鬱なとしか言いようのない厳しい表情の、全体になにか重いものを引き摺っている印象の人である。日本語がうまい。マーシャルに進出した日系企業に工場長のような立場で勤めていて、日中は忙しく、夕方や日曜の休息の時間を私のためにさいてくれた。父親は日本人という。しかしお父さんはマーシャル語もよくできた人で、日本人の少ない離島ウォッチェに住んでいたというから、カナメさんが日本人の間で育ったという訳ではない。日本の統治は日本語での現地人教育を重視し、学校制度もよく整備されていた。彼は公学校（3年制）、補修科（2年制）を出、さらにパラオの木工徒弟養成所に学ぶという、



クワジェリン基地(背後)から帰宅するイバイ島の労働者たち

社会文化コース助教授 清水昭俊

ミクロネシア人に許された最良の教育を受けている。しかしこのエリートコース出の人でさえ、日本語の読み書きのできる人は極く例外的にしかない。カナメさんは、私は日本人であることに誇りを持っている、日本のことや戦争のことを勉強しているんです云々と、会社を通して毎月手にいれているという『文芸春秋』や阿川弘之の『暗い波濤』の文庫本などをみせて、私を驚かせた。彼の日本語が、大人になってからの努力の賜であることが窺える話である。

分厚い2冊の文庫本に収められたこの長編は、表題の通り、決して読んで楽しい小説ではない。その最後の方に、ヤルトを舞台とした1章がある。カナメさんの戦争体験は丁度この章で描かれている、籠城日本軍と現地人との葛藤に重なるものであったらしい。ミッドウェーで手痛い打撃を受けた日本軍は、拡張から防衛へと戦術を変え、絶対国防圏なる構想で体制を立て直そうとする。マーシャルはその東方の最前線と位置づけられ、特にカナメさんのいたウォッチェのほか、ミレ、ヤルト、クワジェリンが要塞化された。しかし米軍は、設備の比較的手薄だったクワジェリンを攻略し、マジュロに無血上陸して、両環礁をカロリン・マリアナに進出する拠点とした。米軍に素通りされた形のウォッチェ、ミレ、ヤルトの日本軍は、敗戦まで籠城を余儀なくされる。この日本軍にとっての最大の敵は、空襲や艦砲射撃をかけてくる米軍とともに、飢えであった。元々植生の貧弱な、そのうえ爆撃で徹底的に破壊された環礁の小島に、現地人に数倍する日本人が立て籠もったのである。補給を断たれた日本人にとっては、生きる術を知っている現地人の確保と使役が死活問題だった。小説は日米両軍の間の現地人掌握争いの悲惨を描いている。カナメさんのお父さんの立場がどのようなものだったのか、詳しいことは分らない。日本人とはいえ、民間人で、妻は土地の人。日本軍とは距離を置いていたように思われる。カナメさん親子は夜闇に乗じて、飢えと爆撃に悩まされるウォッチェを脱出する。まる1日海上を漂う間に米軍に「捕まって」、既に米軍基地となっていたマジュロに連れて来られる。父親はさらにどこかへと

連れ去られ、それ以後カナメさんが父親に会うことはなかった。後に、お父さんはハワイに連れて行かれ、終戦時にサイパンで亡くなったことを知ったという。

残されたカナメさんは母親をかかえて、独力で生きて行かなければならなかった。所は「敵地」のマジュロ。最初は米軍の修理工場で工員をした。英語は全く分らなかったが「— というより習う気がなかったのではないかと思う—」、日本人だからと馬鹿にされたくなくて、夢中で働いた。それを認めてくれたのだろう、英語の分る工員長などと同じ給料をくれた、という。

その後のカナメさんの生活については、詳しいことは聞いていない。軍政が終り、米軍の関心が軍用地としてのクワジュリンやビキニ、エニウエトクに集中するにつれ、マジュロではアメリカに対する対抗心をかきたてる条件も減って行ったと思われるが、カナメさんは日本人としての気を張り続けた。やがて進出して来た日系企業は、彼にとって良い働き場であったに違いない。しかし日系企業にとってはカナメさんは日本語のよくできる便利な現地人に過ぎず、阿川弘之を読む能力まで必要としている訳ではない。マジュロでは生活に必要なものは全て現金で買わねばならず、カナメさんの家も粗末なあばらやであった。

「私は大和魂を信じています」というカナメさんはまた、こんな話もしてくれた。マジュロに連れて来られて間もなく、補給物資を積んだ大きな貨物船がマジュロ環礁の内海に入った。運んで来た補給食糧のほんの一部に傷んでいるものが見つかった。米軍は貨物船の荷を全部はしけに積み替え、外海に曳き出すと、はしけごと沈めてしまった。しかし逆風に押し流されて、大量の缶詰が浜に流れ着き、マジュロの人々は争ってそれを拾い、「私も随分拾って食べた。それがおいしいんです。私はがっかりしてしまって。ウォッチェでは日本人が皆んな飢えていたというのに。アメリカにはとてもかなわないと思いました。」カナメさんは結局、マーシャルにも日本にも、ましてアメリカにも自己を帰属させることができなかった。マーシャルの人には珍しい彼の沈鬱は、半生を彩った敵しい感情を押し殺した表情であったのに違いない。

マジュロ随一の瀟洒な建物にはいつているアレレ博物館には、ヤルートの終戦処理を伝える何葉かの写真が展示されている。日米双方の将校の最初の出

会いらしい場面では、若い日本の将校が、ネクタイ、長袖の厚手の軍服、ゲートル、軍靴、帯刀の正装で、姿勢正しく敬礼して相手を迎えている。その後には徒兵らしい兵士を伴っているが、彼の方は半袖開襟シャツ、腰から縦に吊った軍刀、ゴムの長靴。帽子の両脇からは厚さよけの手拭いを下げている。将校の方が気弱いともみえる軟らかい表情であるのに対し、この徒兵の方は上体をそらせ、両足を幾分広げ、敬礼の手も指が開いていて、撫然たる顔の表情。全体にいかにも敗残兵の印象。この2人に迎えられている米軍の将校の方は全くの丸腰で、半袖の開襟シャツ姿。階段を上りつつ返礼しているのか、片膝を上げ、左手にパイプを持ち、右手で軽く敬礼している。形式をはずした気楽さがでている。写真はその場面しか伝えはしない。しかし事ここに至った過程や彼らの心情に思いをはせさせるものではあった。

もう一人、こちらはむしろ気にかげさせられたのがアレックである。マジュロに着いて間もないある日、路上で「コジャエヤボナベに行った日本人が来ているという話を聞きましたが、あんた知りませんか」と日本語で声をかけられたのが発端だった。



「けまり」で遊ぶアルノの人々

彼はコジャエの出身。私は沢山の言葉ができるという。コジャエ語、ボナベ語、日本語、沖縄語、英語、マーシャル語、トラック語、ヤップ語、パラオ語、モルトロック語、ピンガラップ語、モキル語、ガチック語、カビンガマランギ語、サイパンの言葉、ナウル語、ギルバート語。まるでマイクロネシアの言葉をリストアップするような調子で教え上げる。片言だけでも知っている言語を列挙したとも疑うことができるが、一体にコジャエの人は外国語の習得にすぐれており、例えば老若を問わずボナベ語のできる人が多くて、コジャエ語を知らない私でも全く不

自由しなかった経験があるので、アレックの自慢をそのまま受け取ることにした。

何故こんなに外国語ができるのかといえば、その経歴がまたすごい。コジャエで公学校、ポナベで補修科、パラウで「木工」を出たあと、サイパン、日本の学校で計3年強学び、再びパラウに戻って南洋庁に1年半勤めた。その後ようやくコジャエに帰り、公学校で3年、日本人子弟の通う小学校で2年、先生をやった。戦争が終り、日本人が全て引き揚げ、身に着けた日本語が役に立たなくなって職を失った。コジャエを出てクワジェリンに流れ着き、米軍基地で長年メカニックをやった。マーシャルの若い女と一緒にになり、マジュロに移って来て、今はナウルの会社の夜警をしているという。

自分の来し方を語るその表情にはどこか落魄の趣があり、遠くを見るような目で「あゝ、日本が戦争に勝っていたらねえ」という。私はそれを、自分の人生はもっと幸せだったはずだとの慨嘆と聞いた。そして再び、自己の人生を大国の間の歴史に翻弄されるものとしてしか描くことのできない弱小の民の悲しみを思った。暗い波濤にもまれたのは若い日本人士官ばかりではない。

二度目か三度目に遊びに来た時、彼はいい出しにくそうにきりだした。まだ小さい子供にはいい教育をさせてやりたいとミッション・スクールにやっている、公立なら費用はいらないのだが、給食費を40ドル、明朝までに払わねばならぬ、12ドルが足りない、貸してくれないか。こういう類の話には、相手が日本人でも首をかじげるところだが、金額が大したものではなかったのと、子供の教育にかこつけての無心だったことから、貸すことにした。

その後何度か彼は遊びにき、その都度、金は必ず返すといっていたが、私の出発の日が近づくにつれ姿を見せなくなった。たまりかねて彼の働いている会社を訪ね、催促の手紙を置いてきたりしたのだが、とうとう彼は姿を現わさなかった。出発の日、飛行場でたまたまコジャエ人の係官と雑談した。アレックの妻はまだ若いとの私の話に彼は、アレックの奴、また女をとりかえたか、と驚いていた。また、マーシャルの次に訪れたコジャエでは、アレックは小学校の先生なんかじゃなかった、あれがしていたのは日本人の先生の小使い、とも聞いた。しかし私は今でも、「日本が戦争に勝っていたらねえ」という彼の言を歎きの声だと思っていた。

ナイロビでの学生生活雑感

地域文化コース3年 古川 哲 史

「アフリカを体験しているのですね。」と言われたことがある。しかしアフリカ大陸は広い。まだケニアとタンザニアの一部を垣間見た程度で、飢餓などの実態も目にしていない。

1985年の4月に、ケニアの首都ナイロビにある日本＝アフリカ文化交流学院の19期生として、この地にやって来た。そして、4ヶ月余の学院その他での研修を終え、9月からケニア、タンザニア各地を訪れた。年末年始をナイロビに戻って過ごした後、再び辺地へのサファリ(旅行)にで、3月には帰国の予定である。

学院は1975年に、日本人に東アフリカの共通語であるスワヒリ語や英語、アフリカ事情などを習得する機会及びアフリカで生活する機会を与えるため星野芳樹・巴夫妻によって開設された。毎年4月(前期)と9月(後期)に日本から男女6名・計12名ずつ学生を受け入れており、現在は20期生が学んでいる。学生の年齢、学歴、職歴が多岐にわたっている

のが特色でもあり、19期生の場合には大学生から30代後半の「社会人学生」と言うべき人まで20歳近く年齢差があった。応募の動機も大学の卒業論文制作や実地での見聞、当地で仕事をする準備、野生動物への関心、アフリカの音楽が聞きたくてといったものまで、各人まちまちであった。

研修期間は4～5ヶ月であるが、各期とも3学期に分けられている。一学期と三学期は学院で学ぶ。二学期は前記の学生は近くのミッション系の語学学校へ編入し、後期の学生は研究所の機能も備える国立博物館での研修となっている。卒業式当日には学生自らが制作したスワヒリ語劇を演じることが習わしとなっている。

一学期は講義は午前中だけであるが、ケニア人、イギリス人、日本人の講師から、語学をはじめアフリカの芸術に至るまで多くのことを教わった。二学期は語学学校に6週間通うもっともつらい時期であった。主にヨーロッパを中心とした各国から来ている

人達と、朝から夕方まで机を並べてのスワヒリ語の研修である。外国人に混じって勉強するという初めての体験であり、彼らの積極的に質問する態度や講義内容に対する不満を講師に遠慮なくぶっつけるといった態度に、目を丸くさせられたこともあった。三学期はナイロビ大学からの講師やケニアの文化人によるアフリカの政治や歴史、文学などの講義があり、それにスワヒリ語劇の準備が加わり少々忙しい時期となった。この期の講義はすべて英語で行なわれたので全く理解できないまま終わった講義もいくつかあった。また、講義後の各人の内容把握が全く違っており、皆で大笑いしたこともあった。



ナイロビの国際会議場周辺

卒業式に演ずるスワヒリ語劇は、学院生活の集大成ともいべきものである。内容についてはこれまでのところ「夕鶴」など日本の昔話似的なものの脚色が多く、脚本から衣裳まで学生の手で制作され、学院のポーチを舞台に公演される。19期生の場合は「わらしべ長者」の話にカメレオンを登場させるなど大幅に手を加えたものを、200人程度の観衆の前で演じた。演劇に関しては全くの素人集団が、覚えたてのスワヒリ語で1時間近くも演技するので、不安と緊張の連続であった。しかし無事に終えることができ評判も割合に良かったので、その喜びと解放感は格別のものがあった。卒業式の後には農村での数日間のホームステイが用意されていた。これは週末に学院の車に分乗して各地へ出かける遠足とともに、地方の生活を学ぶ課外的な活動の一環として有益なものであった。

学院在学中は全員が寮生活であるが、東アフリカの玄関と言われるナイロビでは気候も快適であるうえ、ほとんど物に不自由することがないため、生活

面で困るようなことはなかった。また、外出して各自いろいろな体験をしるとの配慮からか、カリキュラムが余裕を持って組まれており、自由に行動することが最大限認められていた。このおかげで、行きずりの旅行者でもなく、かと言って仕事を持っているわけでもない、いわば当地では日本での学生生活とは違った意味での中途半端な存在になり得たのであるが、私にとってこの体験は貴重なものであったように思う。学院在学中から様々な人と出会えたのも、そのような立場に置かれたからである。日本人だけでも、企業の駐在員や研究者からリュックを背負った放浪的旅行者まで様々である。各人の立場にもとづいたアフリカ観や各地の興味深い話を聞かせてもらうことができた。

学生を過密なカリキュラムで縛りつけず自由に行動させてくれる学院の寛容さは、幅広い講師陣を招いてくれるとともに、日本の教育の現状と比べて特筆する価値があり、アフリカの地では貴重なもののように思う。さらに、学院には日本語を学びたいという外国人のために、日本語を学びたいという外国人のために、日本語講座などが設けられていることも、文化交流という観点から付け加えておきたい。

ケニアに来たのは「アフリカはおもしろいそうだ。」とか「アフリカを知りたい。」という漠然とした気持からであった。しかし当地に来て一番衝撃を受けたのは、在留邦人の様々な生き方であった。日本で大学という狭い枠の中で生活していた私には、想像もできなかったような日本人がごろごろしている。特にアフリカの自然とか現地人との係わりという点においてである。海外に出ると日本のことがよくわかると多くの人が言っているが、この言葉が実感された。



ホームステイ先の村の主婦



日本アフリカ文化交流学院までの筆者

一方、当地に一年近く滞在したいま、少しはアフリカがわかるようになったかと言えばそうとも言い難い。私のアフリカに対するイメージはますます混沌としてきたように思う。それは、この大陸から「ア

フリカ」という一つの言葉で捉えることのできないほど広大で多様すぎるためなのか、日本で抱いていた「アフリカ」に対するイメージがあまりに偏ったものであったためなのか、それとも短期間にもかかわらず当地で受ける刺激があまりにも強烈すぎるためなのか。おそらくは、それらすべてからくるものなのであろう。

今後アフリカとどう係わってゆくか、いやアフリカと係わってゆくかどうかさえわからない。しかし、今回の学院生活をはじめ、各地への旅での数々の体験、そして当地の日本人やアフリカ人から教わったことを、日本へ帰ってから何らかの形で活かしたいとは思ふ。

(おことわり=これは京都市の『創造的市民』に求められた原稿の一部に加筆したものである。)

5. 特別研究論文題目紹介

I 卒業論文

コース	氏名	論文題目名
地域文化	舟津 洋良	漱石「大學論」について — そのモチーフと方法 —
	小幡 信州	自由/民衆/ナチス — なぜナチスは出現することができたのか —
	岸 泰弘	エーリッヒ・ケストナー「飛ぶ教室」について
	小林 信之	ハイデッガーの存在論に基づく言語・非言語の考究
	田野 口二郎	桃太郎唄の成立と変化
	寺岡 喜久男	愛媛県における柑橘農業地域
	野中 喜雄	ブルースの歴史 — 黒人文化としてのブルース —
	伊藤 利浩	嘉村謙多小論 — 作品構造を中心に —
	入江 伸子	メキシコ・グアダルーベ聖母に関する一考察
	大牟田 聡	問題としての大江健三郎
	岡崎 美和子	色彩語についての研究
	小笠原 成章	恐怖の系譜 — 怪奇文学・伝承の流れ —
	尾崎 折美子	長谷川テル研究試論 — 中国革命烈士の虚像と実像 —
	小田 貴之	フンボルト研究
	角井 英明	報道写真研究
	神野 滋	マルティン・ハイデッガー研究 — 「Was ist Metaphysik?」(「形而上学とは何か」) —
	神田 哲也	マレーシアにおけるネーション・ビルディングと華人問題 — 5月13日事件を通して —
	菊地 廣	タイにおける経済開発と農村の変化

コース	氏名	論文題目名
地域文化	嶋田 奈穂子	肥後における加藤清正の土木治水事業
	清水 律子	象徴としての芸術 — その視覚形態への投影 —
	杉本 喜信	東南アジアの都市に関する考察
	高崎 雅人	インドのカーストラランキングをめぐる一考察
	武智 公博	風景論
	時広 和美	セツルメント運動におけるジェーン・アダムズ
	時本 素子	アメリカ女性の管理職における光と影
	西田 由美	サンテグジュベリにおけるきずな
	野原 尚美	前工業化イングランドにおける子供観
	藤土 千浩	生きにくさ — 分布の記述 —
	松井 健史	高度技術をめぐる貿易紛争 — 日米通信摩擦 — The Dispute in High technology — The US - Japan Economic Friction in Tele-communications —
	南 裕子	「自己存在」について
	村田 睦	在韓被爆者問題の現状と問題点に関する一考察
	森川 伸江	谷崎潤一郎研究 — 「細雪」の世界とその魅力 —
	安田 直紀	モダン・ジャズ考察
	山本 信介	ハイデガーにおけるDaseinについて
吉永 文路	マザー・グース研究	
社会文化	奥田 浩典	外食産業の革新とその新たな展開
	久保木 瑞穂	ヘンリー・A. キッシンジャーの限定核戦争論
	山口 広幸	入会林野近代化事業について — 広島県の場合 —
	東 俊介	明治地方自治体制の展開に関する一考察
	石野 幸彦	民間資本ストックの地域分析
	井上 敦司	教育と人権 — 体罰に関する判例の研究 —
	植木 章夫	パレスチナ問題の展開
	浦川 美代子	日韓併合の一断章
	江種 宏泰	中国新聞における技術革新に関する一研究
	大木 哲也	アメリカ核戦略の転換とその実態 — 戦略防衛構想 (SDI) に関する考察 —
	大友 真	地方行政と住民参加
	岡林 敏隆	インドネシアのエネルギー問題
	國生 俊朗	筑豊産炭地の再開発過程
	坂井 克彦	米の生産調整に関する一考察
	谷口 秀隆	虚偽論に関する一考察 — 戸坂潤をめぐる —
	田村 茂	戦後アメリカ自動車産業の変遷
	塚崎 耕治	環境アセスメントの現状と課題
	土谷 英樹	下請制の今日的役割 — メカトロニクス化への対応を中心に —
	中江 広徳	タイにおける工業化と日本からの直接投資、繊維産業のチース
	中畑 裕一	最近における我が国の小売機構の動向 — その業態別動向を主として
	中村 薫	イスラム原理主義の抬頭
	中村 昭一	大都市圏内部構造の実証分析
	永井 庸輔	マレーシア経済と天然ゴム産業
	濱村 寿紀	フェミニズムをめぐる一考察
	堀 美穂子	働く婦人と母性保護 — 女性は働き続けられるか —

コース	氏名	論文題目名
社会文化	三好 良和	極東における米国の核戦略
	山下 弘幸	最近我が国における社会資本の構造変化
	山田 康博	ソ連核戦略に関する若干の考察 — 相互制止の維持をめぐる —
	吉田 濃	政治学における国家観の問題点
	六田 一博	産業構造と人口に関する史的考察
	渡邊 智樹	タイの都市化と人口移動 — その経済的側面 —
情報行動科学	若杉 泰至	終夜睡眠における脳波のスペクトル分析
	池本 典世	気象衛星の雲画像からの風向速の算出
	磯村 真美	太陽虫の細胞融合に関する研究
	井上 伸二	計算機による定理の証明についての1つの試み
	牛田 聡史	PROLOG様言語とそのインタープリタの製作に関する研究
	大木 由香里	タッチパネルの入力データの誤りについて
	片岡 康彦	脳波を指標とした大脳半球機能差の研究 — 刺激の種類と課題内容の効果について —
	河相 茂	リレーショナル・データベース（事務処理用）に関する研究
	川野 秀夫	整数論における計算の複雑さについて
	小原 佐和子	ツメガエル肝細胞の発生における形質の転換機能
	佐々木 陽子	ロールシャッハテストを用いた知覚発生の類似性に関する研究
	重本 知子	Personal Spaceの行動的、心理的、生理的反応に関する実験的研究
	清水 桂介	自動配線プログラム
	鈴木 康	視覚弁別学習事態にはおける脳誘発電位の変化
	中島 鋼一	パーソナルコンピュータによるロボット操作に関する研究
	中曾 浩子	PLAのCADに関する研究
	西尾 智律子	杵光周期下におけるデンショバトの摂食活動に関する研究
	林 光緒	眠けの日内変動リズムに関する研究
	原田 智子	パーソナルコンピュータによる動画像に関する研究
	桧垣 美穂	タッチパネルの有効利用について
	平田 かつみ	前骨髄性白血病細胞における癌遺伝子の構造 — コスミドライブラリーの調製 —
	平松 孝之	緊急脱出行動に関する実験的研究
	藤田 雅行	リーダー行動の帰属と認知の関係についての実験的研究
	藤本 正徳	パーソナルコンピュータにおけるグラフィックデータの圧縮
	持田 謙二	バイオフィードバックによる心拍率制御に関する実験的研究 — 訓練時間・日数の効果の検討 —
		森野 廣枝
	山田 香代子	対人関係場面におけるディフェンス・スタイルの変化に関する研究
	山本 みどり	受け手のメディア志向と伝達メディアが説得に及ぼす効果に関する研究
	米村 あゆみ	不安が課題遂行に及ぼす影響についての実証的研究
環境科学	小田 久	高野地区における地すべり調査
	川口 弘行	チョウ類の性フェロモンの化学的研究
	広川 光司	低温度星の分光解析
	古田 充宏	西中国山地における山村の土地利用と環境認識 — 広島県山県郡戸内町那須を事例にして —
	山根 満喜	斜面放射に関する実測及びシミュレーションの比較研究
	生城 真一	副腎皮質におけるステロイドホルモン合成機構
	和泉 洋太	沖積低地の洪水常襲地域における土地利用変化

コース	氏名	論文題目名
環境科学	岩嶋 宏幸	有機太陽電池における光学的フィルター効果：エキシトンの拡散長および空間電荷層の厚さの評価
	宇都宮 吉治	液体ネオンのラマン散乱
	小林 正興	都市気候に及ぼす河川水の影響に関する熱収支モデル解析
	柴田 光信	森林生態系のリン循環における植食性昆虫の役割
	高井 克房	等角写像について
	高田 善雄	岡山県川上郡川上町西部付近の中・古生界の地質および自然災害についての研究
	滝口 善博	土地条件が土地利用に与える影響
	中川 司	矮性オオムギの生長とエチレン生合成
	濱田 隆	温帯林の種組成・構造と遷移
	原 龍一	尾崎地区における地すべり調査とその考察
	東山 浩幸	専門分野の形成について — 環境科学の場合 —
	福木 充伸	コーシーの積分定理とその応用
	福本 彰	液体アルゴンのラマン散乱
	堀切 実	代数曲線における特異点の解析～Noetherの定理～とその応用
	眞崎 博之	マングローブ植物の生育に関する生理生態的研究
	三田 耕介	ニガキ科植物の生体成分
	宮崎 年雄	中性子スピン・エコー分光器の開発
本川 修	光合成水分解複合体蛋白質群の同定	
森野 慎一郎	Analysis of Singularities of Algebraic Curves (代数曲線の特異点の解析)	

II 修士論文

研究科	氏名	論文題目名
地域研究	平松 郁夫	レヴィニストロースの神話分析の方法
	山川 欣也	19世紀中葉アメリカ都市への一考察 — 1854年フィラデルフィア市・郡統合をめぐる —
	上尾 信也	近代初頭の楽師組合Rollbrüderschaftの研究
	雨野 忍	ヴェレリーの建築理論
	小平 直行	アメリカ帝国主義成立期の外交政策 — キューバ保護国化政策を中心として —
	末永 幸二	徐特立研究序説
	出原 均	絵画の時間
	野村美香子	ジェンダー論再考 — 男/女の文化像 —
	肥後本 芳男	アメリカ革命におけるロイヤリスト
	大山 茂之	フランス・ジェフリーのバイロン批評 (Francis Jeffrey on Byron)
	八田 典子	絵画作品における「タッチ」
	揚 剛	古事記の用字法の研究 — 同一人物の同一称名における異なる用字表記について —
	林 雪星	有吉佐和子作品研究 — 女性像を中心にして —
	環境科学	川口 正
飯島 祥二		広島湾岸の土石流災害
石亀 勝義		太陽虫軸足の収縮力について
石山 唯子		12GerPP 散乱におけるQCD効果

研究科	氏名	論文題目名
環境科学	板崎 徳禎	Algorithmic generation of test patterns for circuits with tristate modules. トライステート・モジュールを含む回路のアルゴリズム的テスト生成法
	井上 誠司	リボソームに組み込まれた副腎ミクロソームステロイド水酸化電子伝達系の反応機構
	今田 隆夫	超流物 ⁴ Heのラマン・スペクトル構造
	岩根 典之	点集合からグラフを抽出する一手法
	内田 洋一朗	土地条件と浸透能の差違が斜面形に与える影響
	大原 高志	カボチャ幼植物中に存在するサイトカイニンの定量法の検討
	兼綱 孝紀	広島市における逆転層の特性とそのメカニズム及び要因分析
	鎌田 磨人	カワトンボ雄2型の配偶戦略
	河村 敦	デンショバトにおける行動のサーカディアンリズム — 照度とオペラント強化スケジュールの効果 —
	笹谷 亨	X線小角散乱による強誘電性液晶の研究
	下島 公紀	沿岸域における重金属の分布と挙動
	武知 敬憲	酵母ベルオキシソーム系遺伝子の多重性に関する研究
	田中 章司郎	拡大都市圏における社会環境変化が生態系に及ぼす影響について
	永田 浩	比熱による希土類金属間化合物RMn ₂ の研究
	成田 実香	論理式変換による推論システムの研究
	西 孝子	原生動物太陽虫の膜の電気現象
	西中 勝喜	高密度物質の熱力学的性質の理論
	新田 陽子	溶媒抽出 — 誘導結合高周波プラズマ発光分析法の研究
	波佐 間正聡	骨髄性白血病細胞の分化誘導機構についての研究
	藤岡 美輝	トリ胚強膜線維芽細胞が無蛋白条件下で分泌するオートクリン増殖因子の抽出とその性質
ベラス ゼナイダ M.	BIOCONCENTRATION OF HEAVY METALS IN CULTURED OYSTER (養殖カキの重金属濃縮)	
町 敬人	EuSe _{1-x} Sxの磁性	
松尾 克美	熱収支法による西条盆地アカマツ林からの蒸発散解析	
松田 方典	土砂災害防止に関する基礎的研究 — 昭和60年6月豪雨による広島県東部の災害について —	
三船 充	ランドサットMSS データ解析のためのプログラム開発とその応用 — 江田島山火跡地の植生遷移の解析 —	
宮城 島浩之	平面図形の離散処理法	
柳 雅之	レーザーパルス・フォトリシスによる光合成水分解系電子移動過程の解析	

8. '86総科カレンダー

編集部

Welcome to the Faculty of Integrated Arts & Sciences. 総科にはたくさんの行事があります。五月病になっている暇などない、ぐらいいです。1年生は積極的にこれらの行事に参加しましょう。きっといいことがありますよ。

[4月]

○入学式

おめでとう。今日から君も総科の一員だ。Good Luck For Your Future!

○ガイダンス

教官によるものと学生によるものがある。総科を知り、大学生活の上でも参考になるので是非参加して下さい。

○コース決定(2年)

ついにコース決定。泣き笑い様々。1年生諸君には外国語コースが新たに加わります。1年間じっくり考えてから決めた方がいいかも…。

○前期聴講受付(2週間)

時間割りは自分で作ります。わからないことは優しい先輩方に聞きましょう。この頃、奨学金や授業料免除の案内があるので注意しておくこと。

○オリキャン(4月26, 27日)

宮島での楽しい2日間。全学行事なので、この機会に他学部にも友達の輪をひろげよう。よくあることなんです、必ず何組かカップルができるのです。

[5月]

○新歓コンパ

1年生をあたたかく迎える楽しい宴会。酔いつぶれるのもいいでしょう。“安芸の国”はいやでも覚えることになるので早めに習得しましょう。

○春期ソフトボール大会

総科行事の決定版!このときばかりは上下の関係なく、全員の眼が血走ります。そのあとの打ち上げは絶品。プロレスあり、歌あり、何でもありの無礼講。

○教育実習(4年)

広大附属福山中、高等学校で行ないます。何事も経験です。行きたい人は教育専門科目(2年から)を取りましょう。

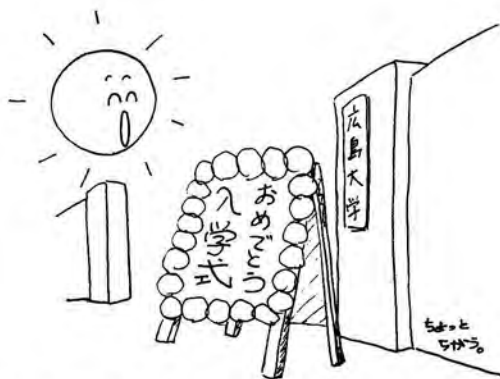
[6月]

○家庭教師ガイダンス

学校で斡旋を受けたい人は行って下さい。たぶん、大学の厚生課前に情報が出ると思います。

○6月祭

森戸道路にはたくさんの露店。総科生も店出して



この機会に一旗上げよう。

○総科創立記念日(6月7日)

12歳の誕生日。でも休みじゃありません。

[7月][8月]

○夏休み(7月11日~9月4日)

やってきました。お待ちかねの長〜い夏休み。有益な使い方をしよう。ただし、夏休みぼけは早めに直した方が後々得するでしょう。

[9月]

○前期試験

1年生には不安の種でしょう。このときばかりは皆さん勉学に打ち込むしかありません。なぜかコピー機に人が群がるんですよ。

[10月]

○秋休み(10月1日~14日)

試験休暇。試験中、がんばった人もがんばれなかった人もゆっくり休みましょう。

○成績発表

花より団子、DよりC?でも、D取って青ざめているうちが花。なーんも感じんようになったら…。ああ、憂うつな波が押し寄せる。

○後期聴講受付

前期と同じ事ですが、このあたりから5コマめが出現するのが魔可不思議。厳寒の1コマ目はきつい!!

[11月]

○大学祭

大学最大のイベント。この3日間はお祭り騒ぎです。映画・店出し・コンサート。さて、あなたは何に参

加しますか。総科生も店出しして、もうけよう。

○秋季ソフトボール大会

今回は事務と教官チームが加わり、ますます熱い戦いが繰りひろげられます。4年生は燃えています。社文のみんな、そろそろ本気だそうぜ…。

[12月]

○冬休み(12月21日～1月7日)

猫はこたつで丸くなる、ように過ごします。

[1月]

○コースガイダンス

1年生対象の最後のガイダンス。これを聞いたあと、コース希望最終決定を下します。

○卒論締め切り(4年)

この時期、4年生に近づかない方がいい。からまれますよ。

[2月]

○後期試験

前期の雪辱を果たそう。成績発表は4月です。

○卒業祝賀会

みんなで卒業生を祝う会。あたたかく見送ろうではありませんか。お世話になりました。

[3月]

○卒業式

あおげばとおーとし、わが師のおん。社会人になる人も、院に進む人もお元気です! 別れとはやはりつらいものです。涙、涙の卒業式。

○春休み(3月1日～4月8日)

次の学年に向けて充電しないとしばむぞ。旅行したりするのもいいでしょう。4月までSo Long!

<その他の行事>

○文化バス

一般教育の学生対象ですが、誰でも参加できます。詳しくは厚生補導係まで聞いて下さい。(春・夏・



秋1回ずつの予定。)

○フェニックス駅伝

体育会主催の駅伝大会。広大一呉を往復します。学部長杯もあるので、チームを作って総科の皆様もがんばりましょう。

(文責 野田啓三)

●特別付録 総科 安芸の国

一. 比叡は安芸の国 広島街の街よ

広島街なら 大学は広大

二. 広大来るなら 総科にしゃんせ

夢あり希望あり コンパあり

三. コンパばかりで過ごしはせぬが

酒飲みゃ 友達増えていく

四. 友達増えても恋人は出来ぬ

それが総科に来た誤算

五. ゴサン ゴサンと我等を呼ぶな

誤算は進歩の母なりき

六. 父ちゃん 母ちゃんを故郷に残し

やってきました安芸の国

七. 秋も深まり 霜月の初め

我等の力を試すとき

八. 我等の力に果てはない

我等の心にや 恥もない

九. 恥も外聞も忘れて動く

それが総科の旗印

十. 広大総科は世界にひとつ

世界にはばたけ総科生 (ひたすら

世界にはばたけ総科生 (refrain……)



編集後記

変貌しつつある総科を特集。だが、総科=大衆食堂という説 — 味は落ちるが何でもそろう — もある。器の変化は、中身の変化をもたらすだろうか。

(広報委員 小野 寛晰)

臭いものに被せられた蓋、どれだけ密かに取ったか。その危うい手際こそ、〈公〉報誌を編む者の快楽だろう。この快楽を忘れたら、〈公〉抜きの情報誌か〈公〉を騙る御用雑誌に、なっちまう。でもしんどいんだよね〜そんなこと。喧嘩と眠れぬ夜が続くからね。こんども日和ったような気がする。ゴメン。

(広報委員 古東 哲明)

『飛翔』の学生編集委員は孤軍奮斗の感があります。総合科学部生はもっと本誌をもり立てて下さい。

(広報委員 清水 昭俊)

総合科学部生の独創性を結晶化した『飛翔』。時代を先取りしようとする姿勢が今回の特集にもよく表われているようです。(厚生補導係 宮城 勝彦)

私は愛される後輩に……なりたい!

(小笠原 弘明)

テーブル起こしにあれだけ時間を食うとは思わなかった。

(青山 幸樹)

本当にいろんなことがあった1年間でした。合格発表の日が昨日のようだけど、私ももう立派な総科生です???わーい。

(鈴木 美緒)

いつになったら私は、うちのワープロと、以心伝心の仲になれるんだろう……。 (藤本 貴子)

藤原が負けた。しかし、前田の理論、ものの道理、現状を超越した猪木へのハイキック一発は“若い”ことの普遍的価値を改めて見るものに知らしめた。なんのこっちゃ。

(吉田 雄一郎)

ホームラン打てる外野になりたいです。

(向山 敦子)

第30号(記念特大号!)を目の前にしてひたすら感無量。特集のタイトルである「新たなる発展」はこの『飛翔』についてもあてはまります。第31号に向け編集部は「新たなる飛翔」をお約束します。ご期待下さい。

(海堀 修)

総科の中では、自分に厳しくないといぬるま湯にどっぷり漬ってしまう。自己満足でもいい、何かに“熱血”を感じてほしい。引退間際の捨てゼリフを残して、僕はアメリカへと旅立つのでした。

(野田 啓三)

『飛翔』No.30を出すにあたっては、外国語コース、社会科学研究科の諸先生方をはじめ、多くの方々から投稿、インタビューなどのご協力を得ました。この場でお礼申し上げます。

なお、自由投稿、イラスト、写真など常時募集しております。自己主張したい方、目立ちたい方、自分の字を活字にしてみたい方などなたでも構いません。厚生補導係又は、下記の編集委員までお願いします。

『飛翔』No.30

編集委員

58年度生 海堀 修 野田 啓三 古川 哲史 向山 敦子

59年度生 田中 誠 吉田雄一郎

60年度生 青山 幸樹 小笠原弘明 鈴木 美緒 藤本 貴子

なお、編集にあたっては、広報委員会の『飛翔』担当、小野寛晰、清水昭俊、難波紘二、古東哲明の各教官、および事務官、宮城勝彦の方々の協力を得ました。